

日本最古のセーラー服制服の復元プロジェクト

金城学院創立 130 周年記念事業として 1921 年 9 月に制定された日本最古のセーラー服制服（7 名の生徒が写る当時の記録写真のセーラー服。P.2 に掲載）を復元するために、130 周年企画委員会のもとにプロジェクトチームが結成された。

金城学院制服復元プロジェクト（* 責任者）

長屋頼子*、青山喜久子、平林由果、長嶋直子、伊藤海織、内田有紀、株式会社明石スクールユニフォームカンパニー、日本毛織株式会社、事務局（岡本吉裕、稲垣太一）

当時のセーラー服制服が現存していないため復元作業で目指したのは、日本最古のセーラー服制服を着用した私立金城女学校の 7 名の生徒が写る記録写真（1921 年）1）の制服である。その他の資料として金城学院百周年記念誌 2）に記載された当時の制服に関する記事、金城学院みどり野会「みどり野」3）に残されている制定当時の卒業生が記した手記を参考にし、また当時の日本の紡績業、毛織物製造の尾州地区における発展、染色・整理の状況を調査し、各工程における作業を進めた。2018 年 7 月 31 日にプロジェクトが発足し、2019 年 8 月 7 日に完成品が長屋頼子プロジェクト責任者に渡された。

1. 100 年前の尾州地区毛織物製造の状況から判断する女学生向けセーラー服の素材について

(1) 尾州地区の毛織物産業の発展

第一次世界大戦前後に毛織物の産地として著しい躍進を遂げる尾州産地は、現在の愛知県一宮市、尾西市、稲沢市などの旧中島郡一円を指す。尾州地区は明治 29 年に綿花の関税が廃止されたのをきっかけに、綿織物業が衰退し、毛織物業に転換することによって再興への道を見出すことになる。その後、大正 12 年には日本最大の毛織物産地となる。

(2) 製織・織機

尾州地区は、セルサージ、サージなどの薄手の梳毛織物とラシャ、メルトンなどの厚地の紡毛織物を生産する地域として発展し、大正 14 年には細番手使いのセル※がウールラインという名称で売り出されヒット商品となる。着尺セルで躍進した尾州地区は、大正中期以降、ラシャやセルジス（洋服用梳毛織物）の製織へ発展。大正末期には、全国比着尺セルが 97%、洋服地は 66% を占めている。また、大正中期、尾州地区では紺色のサージの製織が盛んになっていった。

※セル・・・薄手の平織毛織物

(3) 染色・整理

尾州地区で、毛織物産業が始まった当初は染色整理仕上げがこの地区ではできず、尺幅の純毛セルを京都の西陣の整理工場で作られて市場に出していたが、明治41年になると艷金興業株式会社がドイツ製の整理機を据え付けて整理工場を開業し、「仕上の尾州」としての礎となる。

<まとめ>

100年前の日本における毛織物産業の状況と、ニッケが保有する大正から昭和にかけての織物資料に女学生向け「セルサージ」が現存していることなどを鑑み、当時着用されていた女学生向けセーラー服の素材について、以下の通りと推察した。

織物名称：セルサージ、素材：毛100%

紡績：リング精紡機、織機：シヨンヘル織機、染色整理：反染・紺色

2. 生地から縫製までの作業

100年前の裁断・縫製技術等を考慮して作業を行った。当時のミシンはすべて足踏み式である。既にオーバーロックや穴あけミシンが存在したことを確認し、手縫いと使い分けを検討しながら製作を進めた。現在の作業者にとって足踏み式のミシンを使う事は簡単ではなく訓練を必要とした。写真の制服に近づけるために何度もモデルが着装し、写真と比較、検討を行った。

(1) 上着

- ①推察する生地感、着用感より裏地は付いていなかったと判断した。布の端始末にオーバーロックミシンを使用し、裾及び衿付けの部分は手縫いした。
- ②着丈を長めにする等、それぞれの体型に合うように変更できるデザインを採用していると推察した。
- ③縫い糸は絹糸を使用し、当時は接着芯がまだ無いので、綿の生地をふらしの芯として衿、カフス、フラットなどに使用していたと推察した。
- ④当時はまだスナップが無かったと言われているため、ボタンホールを開けてボタンで留めた。フロントはネクタイを結ぶ事で好みの衿止まりを決めていたと思われる。
- ⑤セーラー衿は、任意の位置で衿を止めても納まる形を再現した。
- ⑥ネクタイは、黒の絹100%を使用した。現在のものは毛100%である。
- ⑦ラインは、復元の制服では衿・フラットラインは2本、カフスラインは上下に各2本である。
- ⑧ネーム・片布・品質表示・ファスナー・面ファスナー・カギホック・スナップ・肩パット・たれ綿・
テープ芯・接着芯などは、百年前に使用されていないと推察した。
- ⑨胸ポケット、内ポケットは付いてないと推定した。

(2) スカート

- ①100 年前にはファスナーは無かったため、スカートの脇は袴の様に空いていると推察した。
- ②写真より、ウエストではなく腰ではなく仕様と推察し、ウエスト上がりを大きく調整した。
- ③プリーツの形は、現在の制服のようにプレスをしっかりと当てたものではないため、アイロンで調整した。
- ④ベルト芯はないと推察し、ベルト布の縫い代で厚みを出した。
- ⑤裾も手縫いでまつり、脇始末はオーバーロックも 100 年前のミシンを使用した。

参考文献

- 1) 金城学院歴史資料アーカイブズ所蔵資料 (1921)
- 2) 金城学院百年史編集委員会編：金城学院百年史、金城学院 (1996)
- 3) 金城学院創立百周年みどり野会事業委員会文集実行委員会編：金城学院創立百周年記念文集みどり野、金城学院みどり野会 (1989)